

SDHS1997年度大会参加報告

鈴木 晶

SDHS (Society of Dance History Scholars) の1997年度大会が、6月19日から22日まで、ニューヨーク市のバーナード・カレッジ(コロンビア大学)で開催された。

SDHSは、CORD (Congress On Research in Dance)と同じく、北米を中心とした学会であるが、国際的な「舞踊学」の学会としては最大規模で、会員数は400名を超える。古い団体ではなく、1979年に学者の連絡組織が結成され、1983年に正式に学会が発足したと記憶している。3年前からは「スニーカーをはいたテルプシコール」で有名なサリー・ペインズが会長だったが、今後3年間にはリンド・トムコが会長を務める。

「舞踊史」というと舞踊学の一分野にすぎないように思われる方もいると思うが、この学会は「舞踊史」の概念を最大限に広く捉えており、時代的にはギリシアの舞踊からポストモダンダンスまでをカバーし、また西洋以外の舞踊伝統をも視野に含め、劇場舞踊に限定せず、いわゆる民族舞踊、社交ダンス、フォークダンスなどをすべて扱う。舞踊アーカイヴの問題、電子テクノロジーの問題(CD-ROMなど)をも大きく取り扱っている。舞踊に関するほぼすべての分野を視野に収めているといってもよいだろう。

またこの学会は活発な出版活動によっても知られている。学会誌は最初は雑誌形式であったが、その後、現在に至るまで「舞踊史研究(Studies in Dance History)」というモノグラフのシリーズとなっており、これまで毎年、「プティバの日記」「ロシアのカルロ・ブラジス」「アシュトンとバランシン」「バランシンのポワントの作品」「ボレロ派の起源」「1930年代の左翼舞踊」など、舞踊研究者必読の研究書を世に送ってきた。最近、ニューイングランド大学出版局の系列会社であるウェズレアン大学出版局と契約を結び、学会誌はそこから書籍として出版される。この秋には2巻本の「妖精再考/ロマンティック・バレエへの新しい視点」が出版される。大会の会場でその校正刷りを見たが、まさに眼から鱗が落ちる刺激的な論文集である。なお、このモノグラフ・シリーズの編集は、かの名著「ディアギレフのバレエ・リュス」の著者リン・ガラフォラが担当している。今年度の大会のタイトルは「過去を振り返る/未来について考える」。というのも、この学会の

第1回大会は今年度と同じバーナード・カレッジで開催されたのである。今年度の大会参加者は約300名。日本からの参加者は私と安田静氏(パリ大学在籍中)の2名であった。

研究発表は50以上あり、3~4の部会に分かれて同時進行した。その他にワークショップが3つ、ワーキンググループ(フォーラム)が3つ、シンポジウムが1つあり、舞踊公演もあった。

余談になるが、わが国の学会、とくに人文系の学会では(もちろん学会によるが)、大学院生など若手研究者の研究発表が多い。大学院生が就職のための業績を作ろうとするからだとも言われるし(時として学会は奴隷市場と呼ばれる)、大学に定職を得た研究者が熱心に研究に励まないからだとも言われるが(これは単なる憶測である、念のため)、欧米の学会では研究発表者の年齢が概して高い。舞踊学関係の学会ではとくにそうである。舞踊学の場合、職業的ダンサーとして、あるいは舞踊教師として仕事をしていた人が、ある年齢になってから大学院に入り直し、研究生生活に入り、修士論文・博士論文に挑戦するという例が少なくなく、そのためもあって学会での発表者の平均年齢も高い。また、活字になった資料だけでもとづいた研究がない、つまり本を読むだけでできるような研究発表が皆無であることも、日本とは事情を異にする。なお、研究者のほとんどが女性である点だけはわが国と同じである。

さて、10年ほど前から欧米の舞踊学はラカン派精神分析とフェミニズムなしには夜も明けないといった感じで、どこへいっても floating signifier, penis envy, male gaze といった用語ばかりが耳に飛び込んできたが、最近フェミニズムはジェンダー研究へと衣替えしているようである。本学会は舞踊史が中心のため、抽象的な舞踊理論をめぐる発表はなかったが、精神分析やジェンダー研究がすでに「常識」とされていることは発表を聞いてもよくわかる。また最近、バロック・ダンスやロマンティック・バレエのリコンストラクションの試みが盛んで、しかも華々しい成果を上げていることを付記しておかねばならない。

以下に各部会のタイトル全部と各部会における発表のごく一部を紹介する。

[6月20日午前8:00-12:30]

1A モダンダンスの先駆者たち

「前へ後ろへ/ロイ・フラーと未来派舞踊の起源」「ヨークシャーのラバン」

1B イメージ、フィルム、イコノグラフィー

「舞踊とオペラ映画/パウウェル=プレスバーガーの『ホフマン物語』」

1C 劇場的实践としての社交ダンス

「危険な踊り/マーサ・グレアムとチャールストン」

1D 17世紀英国の舞踊・政治・文化
「文化的アイデンティティを踊る／ロンドンのバースロミュール・フェア」

[6月20日昼休み]

SDHS 総会

[6月20日午後2:00-4:15]

2A 諸文化と諸アイデンティティの収斂
「ムラ・デーンによる社会的踊る身体の新概念へのジャズ・ダンスの貢献」

2B バロック舞踊の復元
「『アルミードのパスサカリア』のさまざまな振付の比較研究」

2C 1920年代のバレエ
「バレエ・スエドワの『世界創造』によって一体いかなる世界が創造されたのか」

[6月20日4:30-6:00]

3A ワークショップ／レスター・ホートン・ウォームアップ

3B ワーキンググループ／復元

3C ワーキンググループ／民族性と舞踊

[6月20日夜]

シンポジウム／シンシア・ジーン・コーエン・ブルの仕事

[6月21日午前8:30-12:30]

4A 19世紀バレエ
「19世紀初頭の4つのパ・ド・ドウの内容と構造」

4B 戦後ドイツの舞踊
「ピナ・バウシュのタンツテアターにおけるモンタージュとジェンダー」

4C シンポジウム／舞踊資料への電子的アクセス

4D ニューヨーク市の舞踊組織
「大学に舞踊を持ち込むことについて」

4E 初期舞踊に関する新発見
「18世紀ドイツにおける社交ダンスへの新しい光」

[6月21日午後2:00-4:15]

5A バロック舞踊譜の再検討・再想像
「バロック・ダンスの振付におけるシンメトリ」

5B 社交ダンスのトレーニングと文化的同化のパフォーマンス
「1910年代の社交ダンスにおける女性」

5C 伝記の執筆
「アグネス・ジョージ・デ・ミルの著作」

[6月21日午後4:30-6:00]

6A ワークショップ／アフリカ音楽と舞踊を印刷物を通して書く・読む・踊る

6B ワークショップ／ハニヤ・ホルムのサークル・スタディ

6C ワーキンググループ／古代舞踊

[6月22日午前9:00-午後1:00]

7A 社会的抗議の舞踊に関する新しいパースペクティブ

「パール・プリマスとアメリカの舞踊におけるニグロ問題」

7B ジェスチャー、パントマイム、舞踊劇
「古代ローマの舞踊の帝國的な美学」

7C 1400年から1720年までの舞踊と舞踊音楽の形式

「15世紀舞踊の形式」

7D レクチャー・デモンストレーション／18世紀の身ぶり

以下に連絡先をしるしておく。入会を希望される方は私に連絡を下さるか、下記に直接に――

Marge Maddux

Society of Dance History Scholars

Dance Program, University of Minnesota

106 Norris Hall, 172 Pillsbury Drive, S. E.

Minneapolis, Minnesota, 55455, USA

e-mail: maddu001@maroon.tc.umn.edu

また Studies in History の購入を希望される方は

Wesleyan University Press

23 South Main Street

Hanover, NH 03755-2048, USA

Tel: 603-643-7100

e-mail: u.press@dartmouth.edu

なお、次回すなわち1998年の大会はオレゴンで、99年はニューメキシコで、2000年はシカゴで開催される。